



## 言語における自己

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): Language, The self, Speaker, Viewpoint 作成者: 匹田, 剛, 塩谷, 亨 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/2865">http://hdl.handle.net/10258/2865</a>

## 言語における自己

その他（別言語等） のタイトル	The Self in Languag
著者	匹田 剛, 塩谷 亨
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	52
ページ	33-42
発行年	2002-11-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/2865">http://hdl.handle.net/10258/2865</a>

# 言語における自己

匹田 剛\*1, 塩谷 亨\*2

## The Self in Language

Go HIKITA and Toru SHIONOYA

(論文受理日 平成14年 8 月30日)

### Abstract

In language, the self typically appears as the speaker. The location of the speaker or the speaker's viewpoint serves as a basis for the distinction between *this / that*, *iku* 'go' / *kuru* 'come', and *ageru* 'give' / *kureru* 'give'. These examples illustrate one of the essential roles of the self, as the speaker, in the language system.

Keywords: Language, The self, Speaker, Viewpoint

---

### 1 話者

人間にとってもっとも重要な存在は言うまでもなく自己であり、我々は基本的に自己を中心として、即ち自分の視点から世界を眺めている。例えば、感覚器官は全て自分の身体にあり、世界を知覚する際、自分の感覚器官を通してしか感じる事ができない。つまり、ものを見るには自分の目で見るしか方法がないし、音を聞くのも自分の耳で聞く以外の手段はない。我々は常に自己を中心として世界を感じているのである。

テレビで外国の様子が中継されているような場合には一見カメラの視点でものを見ているように考えられるかも知れないが、実際には我々はカメ

ラを通じて送られてきた映像をテレビのブラウン管上に自分の目を通して見ているのであるし、小説や雑誌記事などで他人の目を通じて出来事に触れているような気になっているが、これもやはり他人の目を通じて書かれた文章を自分の目で見ているに過ぎない。

また、仮に複数の人が同じものを同時に見ているような場合でも、それをどう理解し認識するかという点でそれぞれは異なっている。つまり、我々は常に自己の基準に従って相対的に見ているのである。例えば、ある男性の身長が高いか低いかはしばしば人によって判断が異なるものである。この稿の筆者の身長は2人とも174cm程度であるが、これは同世代の日本人としては平均的身長であるので我々の世代からするととりわけ背が高いとは考えられない。その一方で日本人の平均身長が今よりずっと低かった時代に育った我々の親の世代

\*1 小樽商科大学言語センター

\*2 共通講座

の中には、我々は背が高いと見る人がしばしばいる。将来、日本人の平均身長が今より大幅に高くなった場合、その時代の若い世代から見れば我々は背が低いと思われるのかも知れない。

また、より判断基準が個人にゆだねられている例として、食べ物の好みの問題がある。筆者の一人はセロリが苦手であるが、もう一方にとってこれは大好物である。即ち、一方の基準に従えばセロリは「不味い」ものであると考えられ、もう一方の基準では「美味しい」とみなされる。このようないわゆる「相対的な」概念に関わる判断は原則自己の判断基準によって行われている。このような例は挙げていけばきりが無い。

つまり、我々が感じている世界の中心は常に自己であり、自己の基準で世界を観ているのである。この「自己中心的な世界認識」は言語のしくみにおいてもしばしば反映し、言語というものを考える際にもそれが重要な役割を果たしていると考えなければならない場合が少なくない。

言語による発話行為が行われる場合、絶対に存在しなくてはならない主体が一つだけ存在する。それは話者<sup>1</sup>である。聞き手や読み手は場合によっては存在しないこともあり得る。例えば、隣に友人がいると思って話を続けていて、ふと気付いたら隣に誰もいなくなっていて赤面した経験など多くの人にあるだろうし、また誰にも読まれずに日記帳に鍵をかけたか、著者以外の誰にも読まれることのない学術論文が多数刊行されたりしている。これらはいずれも聞き手や読み手の存在しない発話行為の例である。それに対して、発話行為を行う主体は必ず、何らかの形で存在しなければならない。話者のいない発話行為は絶対に存在しないのである。

従って、その人間のもっとも重要な伝達手段であり思考手段である言語にとって話者は最も大切な言語外現実の一つであることは言うまでもないであろう。

言語において話者の視点で世界を眺めていることが顕著に現れることがしばしばある。そして、そのことが言語の語彙的・文法的構造に大きく影響を与え、その成り立ちに深く関与していることがしばしば見て取れる。ごく当たり前の例をあげれば、親族名称などは話者から見た関係によって名前がつけられていることなどが考えられるだろ

<sup>1</sup> ここでは、話し手、あるいは書き手のことをこう呼ぶことにする。

う。例えば、私から見て父である人物は私の母から見れば夫であるし、祖父から見れば息子である。また私の妹は父から見れば娘であり、妹の子供から見れば母である。言語は非常にしばしば話者とその基準点として採用しているのである。親族名称の体系は世界中で様々なバリエーションがあり、まさに言語の相対性、範疇化の多様性を示す例としてしばしば挙げられるものである。例えば、日本語では同じ親から生まれた人を男女と年上・年下に区別し、都合、兄・弟・姉・妹の4つに分類され呼ばれるが、英語では男女のみ区別すればよく、brotherとsisterの2つに分類されればよい。また、平行いとこや交叉いとこ<sup>2</sup>のように、日本語の母語話者にとってはその概念を理解するだけでも一苦労するような親族名称も世界中には多く見られる。このように非常に豊かな多様性を示す親族名称であっても話者とその基準として採用されているという点は変わらない。これはあくまでも一例であるが、かように言語における基準点としての話者は重要な存在なわけである。

また、言語による話者に対する言及は自己に対する言及に本質的に等しい。即ち、言語における自己を考える場合、それは話者と置き換えることができる。

本稿では言語のあり方・構造に自己がいかに深く関係しているかを見るために、基準点としての、自己、即ち話者が言語の構造に深く関わっている例を見ていきたい。

## 2 thisとthatなどの指示詞

### 2.1 英語のthis/thatの区別

基準点として話者の存在が重要な役割を果たしている言語表現の例として最もシンプルなものの一つが英語の指示詞thisとthatの区別である。具体例の第一として、このthisとthatの区別について段階を踏んで分析していくことにする。

ここに鳥好きの少年（便宜上Tonyという名前とする）が一人いるとして、その少年Tonyによる以下の二つの発話を出発点として、thisとthatの区別について分析していく。

(1) I like this bird.

<sup>2</sup> 父の兄弟と母の姉妹、即ち親の同性のきょうだいの子供が平行いとこ、父の姉妹と母の兄弟、すなわち親の異性のきょうだいの子供が交叉いとこである。これらが異なる名称を与えられている言語はめずらしくない。

(2) I like that bird.

例(1)は典型的には、目の前、近くにいる鳥に対して述べている場合に用いられる表現であり、例えばTonyの手の上にとまっている鳥について述べる場合などである。一方、例(2)は典型的には離れたところ、遠くにいる鳥に対して述べている場合に用いられる表現であり、例えば、Tonyからちょっと離れたところにある木の枝に止まっている鳥について述べる場合などに使われる。これらの例によるthisとthatの示す範囲の例をそれぞれ図1と図2として図示する。図1、図2において、それぞれthisとthatがどの鳥を指しているのかについてそれぞれ実線の丸で囲んで示した。

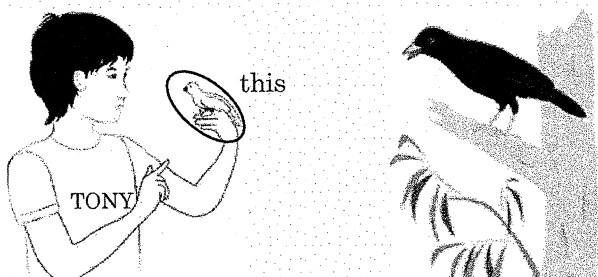


図1 I like this bird.

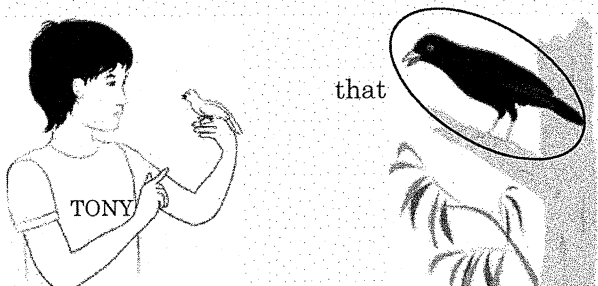


図2 I like that bird.

ここまでの暫定的な分析としてthisとthatの区別は下記のようなになる。

表1 this/thatの区別の暫定的分析

this	目の前、近くにあるもの
that	離れたところ、遠くにあるもの

ここで補足しなければいけないのは、このthis/thatの区別は絶対的なものではないということである。すなわち、どのくらい近くまでがthisの範囲であり、どのくらい遠くからがthatの範囲であると明確な境界線は引くことができない。近い・遠いという判断は主観的なものであるからで

ある。実際、this/thatの区分は相対的なものでもありえる。例えば、上記の例におけるTonyの手の上にいる鳥、Tonyからちょっと離れた所の木にとまっている鳥に加えて、はるか上空を飛行している鳥がいた場合はどうなるであろうか。先の例ではthatで示していたちょっと離れた所の木にとまっている鳥は、はるか上空を飛ぶ鳥に比べてみればずっと近くにあることになる。従って、この場合には手の上の鳥、ちょっと離れた所にある木にとまっている鳥も含めてthis（対象が二つなので複数形のthese）で示し、はるか遠くを飛んでいる鳥をthat（下図では二羽なので複数形のthose）で示すということもあり得る。例えば次のような発話である。

(3) I like these birds, but I don't like those ones.

例文(3)の位置関係を図3に示した。図3において実線の丸はtheseが指すものを、点線の丸はthoseが指すものをそれぞれ囲んで示している。

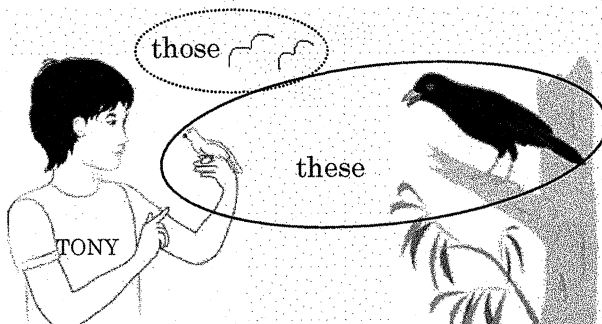


図3 I like these birds, but I don't like those ones.

ところで、表1で示した分析には「近い」、「遠い」という距離の概念が含まれているが、何が鳥までの距離を測る基準点となっているのか。文中で「I」「私」で表されているTonyが基準点となっているということは直感的にわかることであるが、登場人物をもう一人増やして見ることによって、より客観的に示すことが出来る。そこで、Tonyに加えてもう一人の登場人物、Tonyの双子の弟Fredを加えて、二人の人間が関与する場合のthis/thatの区別について見てみることにする。

さすがに双子だけあってFredもTonyと同じく鳥好きであるとするが、双子といえども多少の嗜好の違いはあるものなので、小鳥の趣味に関してはTonyが白い小鳥を好きなのに対しFredは黒い小鳥が好きだということにする。それぞれ自分が好きな種類の小鳥を手の上に乗せて戯れているこ

の二人の兄弟の間でなされた発話として例文(4)の意味を考えてみる。

(4) I like this bird, but I don't like that one.  
この文で this と that がそれぞれ白い小鳥と黒い小鳥のどちらを指すのか考えてみたい。答えはこの文が Tony と Fred いずれの口からの発話によるものかによって異なってくる。もし、話し手が Tony であれば this は白い小鳥、that は黒い小鳥のことであり、もし話し手が Fred なら逆に this は黒い小鳥、that は白い小鳥のことである。それぞれの発話の場合の this と that の指すものについて図 4a, b のように表される。

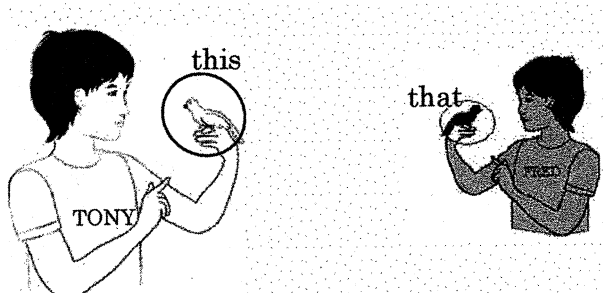


図 4a Tony の発話

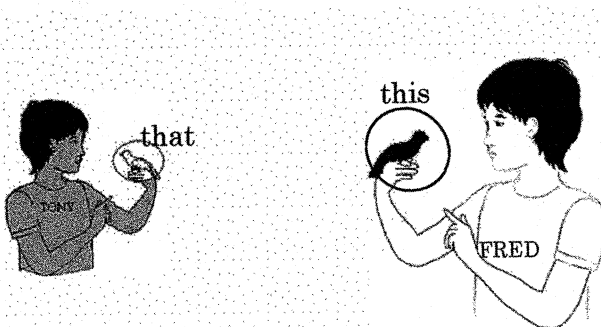


図 4b Fred の発話

これで明らかなように、いずれの場合にも this は発話を行ったもの(話者)の近くのものに指し、that は話者から遠くのものに指していることがわかる。すなわち、this と that のどちらを使うかを定めるためには、対象物までの距離が問題となるわけであるが、その距離の基準点は話者なのである。これに基づき表 1 の暫定的な分析を修正すると表 2 のようになる。

表 2 this/that の区別の分析 (改訂版)

this	話者の目の前、近くにあるもの
that	話者から離れた所、遠くにあるもの

以上のように、英語の this/that の区別において

は、話者が基準点として重要な役割を占めることが示された。

## 2. 2 日本語の「これ」「それ」「あれ」

さて、わざわざ最初に日本語ではなく英語の例を持ってきたのは理由がある。英語が this と that の 2 つの区別を行うのに対して、日本語では「これ」、「それ」、「あれ」の 3 つであり<sup>3</sup>、より複雑なシステムをなしている。そこで、よりシンプルな英語の指示詞の例を先に提示したのである。ここで日本語の指示詞の例を見てみることにする。

英語の this、that と日本語の「これ」「それ」「あれ」は大まかに表 3 のように対応する

表 3 this/that と「これ」「それ」「あれ」

英語	日本語
this	これ
that	それ、あれ

英語の this と日本語の「これ」はいずれも話者の近くのものに指すのに用いられるものであり対応している。しかしながら、話者から離れたものを指す場合には英語では that であるのに対し、日本語では「それ」と「あれ」の 2 つが対応している。つまり、日本語では話者から離れたものについて更に 2 つの区別がなされているということである。では、その区別というのがどのようなものであるのかは、次のような例文を考えれば示すことが出来る。

(5) この鳥は好きだが、その鳥は嫌いだ、そしてあの鳥はもっと嫌いだ。

まず、この発話がなされる典型的な状況を図 5 として示した。図 5 中ではこの発話が Tony から Fred に向かってなされた場合に、「この鳥」「その鳥」「あの鳥」がそれぞれどれを指すのか示してある。英語の対応する指示詞も併記した。

図 5 が示すように、日本語では話者に近いものは「これ」で指すが、話者から遠いものについては、二通りあって、(1) 聞き手に近いものは「それ」で、(2) 聞き手にも遠いものについては「あ

<sup>3</sup> 実際には、例えば連体詞として用いられる「この」、「その」、「あの」など同系列のバリエーションがいくつか存在するが、ここでは「これ」、「あれ」、「それ」で代表させた。

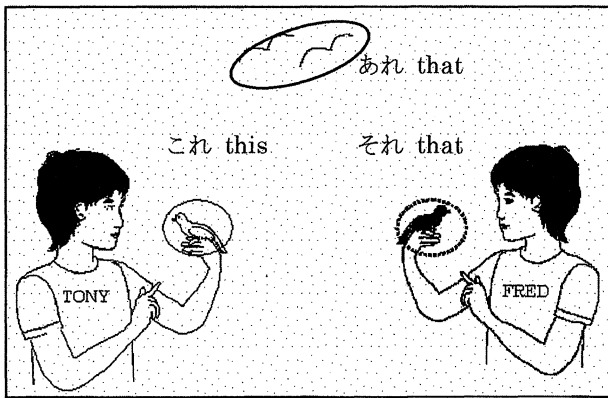


図5 Tonyの発話

れ」で指している。日本語の「これ」「それ」「あれ」の違いについて、英語の this、that と併せて表4のようにまとめられる。

表4 日本語と英語の指示詞

日	英	指す場所
これ	this	話者から近いところ
それ	that	話者から遠く、聞き手に近いところ
あれ		話者から遠く、聞き手からも遠いところ

たとえ話者から遠くても、聞き手に近いところであれば、「あれ」ではなく「それ」を使うということである。例えば、図5において、TonyがFredに向かって次のように発話したと仮定しよう。

(6) この鳥は好きだが、あの鳥は嫌いだ。  
 この場合、「あの鳥」がFredの手の上の黒い小鳥を指すことはなく、TonyからもFredからも遠い所の鳥、即ち図5では上空の鳥、を指す。つまり、日本語では、「それ」と「あれ」は常に明確に区別されなければいけないということである。

### 3 「あげる」と「くれる」

日本語には譲渡行為を表す動詞が色々あるが、その中に「あげる」と「くれる」がある。この2つの動詞の使い分けに話者の視点に密接に関わっている。以下、具体的な例を見ながらこの違いを概観してみよう。

(7) JohnがMaryにアイスクリームをあげた。  
 (8) JohnがMaryにアイスクリームをくれた。  
 これらの例では、「が」格で示される主語であるJohnから「に」格で示される間接目的語であるMaryにアイスクリームが譲渡された点は共通している。

つまり、そもそもJohnが所有していたアイスクリームがこれらの文で示された行為によってMaryに移動したことがどちらの文でも表されているわけである。その点において、これら両者は同じ内容を表していることになる。

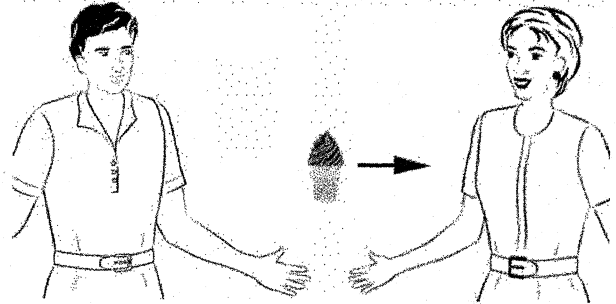


図6 共通する譲渡の方向

では、両者の違いはどのようなものなのであろうか？まず、以下の例を見てみよう<sup>4</sup>。

- (9) 私がJohnにアイスクリームをあげた。
  - (10)\*Johnが私にアイスクリームをあげた。
  - (11)\*私がJohnにアイスクリームをくれた。
  - (12) Johnが私にアイスクリームをくれた。
- これらの例を見ると、「私」から「John」に譲渡が行われる場合は「あげる」、「John」から「私」の場合は「くれる」を使うことがわかる。これはとりもなおさず、譲渡が話者から他者に対するものか、他者から話者に対するものかを日本語が区別していると結論づけられよう。ちなみに、「あげる・くれる」の使い分けが具体的な語彙項目によって決まるものではないことは、以下のように他の語彙項目に入れ替えても同様の結果が出ることから明らかである。
- (13) 私が/僕が/俺が/自分がJohnに/Maryに/友人に/犬に アイスクリームをあげた。
  - (14)\*私が/僕が/俺が/自分がJohnに/Maryに/友人に/犬に アイスクリームをくれた。
  - (15)\*Johnが/Maryが/友人が/犬が私に/僕に/俺に/自分に アイスクリームをあげた。
  - (16) Johnが/Maryが/友人が/犬が私に/僕に/俺に/自分に アイスクリームをくれた。

<sup>4</sup> 「\*」(アスタリスク)はその例が非文、すなわち、その言語では認められないものであることを示す。例えば、日本語では以下の(a)は正しい文であるが、(b)は非文である。  
 (a) これはペンです。  
 (b)\*はこれですペン。

また、「私」や「僕」のようにいわゆる「代名詞」的なもののみならず、以下のように自分の名前や普通名詞を話者を表すのに用いた場合でも同じである。

(花子ちゃんが幼い話者の自称、ちーちゃんはその友達の場合)

(17) 花子ちゃんね、ちーちゃんにプレゼントをあげたの。

(18)\*花子ちゃんね、ちーちゃんにプレゼントをくれたの。

(ちーちゃんが幼い話者の自称、花子ちゃんがその友達の場合)

(19)\*花子ちゃんね、ちーちゃんにプレゼントをあげたの。

(20) 花子ちゃんね、ちーちゃんにプレゼントをくれたの。

(教師が子供達に対して)

(21) 先生が君たちにいい物をあげよう。

(22)\*先生が君たちにいい物をくれよう。

このように主語と間接目的語にどのような語彙項目が来ようとも、「あげる」と「くれる」の使い分けの基準はまさに話者となっており、譲渡の方向性がその基準点を起点としているか終点としているかが区別するポイントとなっていることがわかる。

表5 基準としての話者

あげる	話者が起点
くれる	話者が終点

この問題をさらに深く見てみよう。ここまでの結論は譲渡の方向が話者から他者に向けられているときは「あげる」を用い、他者から話者に向けられているときは「くれる」を用いるというものであった。しかし、ここでの行為の起点と終点は必ずしも話者そのものでなくても構わない。

(23) 私の息子が見知らぬ人にアイスクリームをあげた。

(24)\*私の息子が見知らぬ人にアイスクリームをくれた。

(25)\*見知らぬ人が私の息子にアイスクリームをあげた。

(26) 見知らぬ人が私の息子にアイスクリームをくれた。

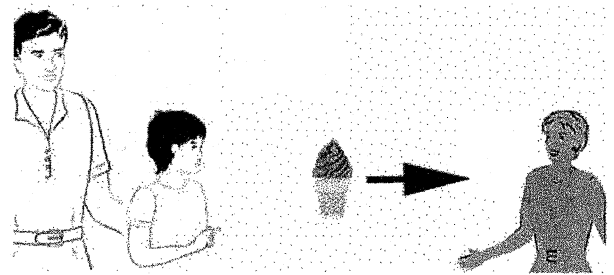


図7 私の息子が「あげた」

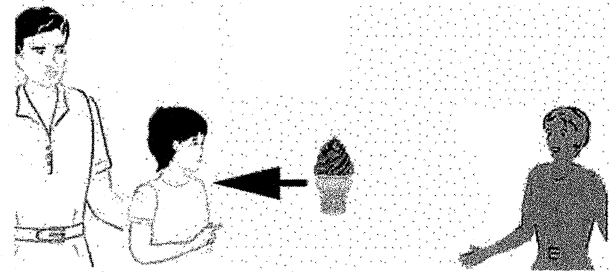


図8 私の息子に「くれた」

以上の例では、話者そのものを表す言葉の代わりに「私の息子」が現れており、譲渡行為の基準点は「私の息子」となっているが、話者そのものを起点または終点とした場合と全く同じ規則性を示している。つまり、話者の領域に属する「私の息子」から「見知らぬ人」へ譲渡が行われた場合は「あげた」が、「見知らぬ人」から「私の息子」に譲渡が向けられた場合は「くれた」が用いられる。言い換えれば、話者の視点はよりあわせ易い「私の息子」に置かれており、よりあわせにくい「見知らぬ人」には置かれていないのである。このことは、以下のように「私の」などの話者の領域に属することを明示的に示す要素がない場合でも同様の振る舞いが見られる。

(27) 妻が上司にネクタイをあげた。

(28)\*妻が上司にネクタイをくれた。

(29)\*上司が妻にスカーフをあげた。

(30) 上司が妻にスカーフをくれた。

ここでの「妻」とはもちろん、話者にとっての妻である。そして、話者にとって視点をあわせ易い「妻」が基準点となり、基準点から譲渡が行われる場合は「あげた」、基準点に向けて譲渡が行われる場合には「くれた」が用いられなければならないのである。

さて、ここで最初にあげた例文(1)と(2)に戻ろう。

(31) (=7) JohnがMaryにアイスクリームをあげた。

(32) (=8) JohnがMaryにアイスクリームをくれた。

これらの例は、一見、どちらも全く同様に可能な



文であるように見える。しかしながら、実際には様々な状況によってどちらか一方のみが可能になるのである。

例えば、John が息子や教え子など話者にとって身近な存在であるのに対して Mary がまだ話者が実際に会ったことのない息子の友人であるような場合なら：

(33) John が Mary にアイスクリームをあげた。

(34)\*John が Mary にアイスクリームをくれた。

というように、John から Mary に対して譲渡が行われたと解釈される「あげた」を用いた方が受け入れられる文になるのに対して、逆に Mary が話者の娘や教え子で、John が会ったこともない人物であれば、その受け入れ可能性は全く逆になる。

(35)\*John が Mary にアイスクリームをあげた。

(36) John が Mary にアイスクリームをくれた。

つまり、この場合も上で見てきたような場合と同じように、話者にとってその視点をあわせ易い要素はどちらかによって文の容認可能性に違いが出るのである。

さて、それでは、太郎と花子がどちらも同程度に話者にとって身近な関係にある場合はどうであろう。例えば、二人とも同じ程度親しい友人である場合、あるいは、話者が教師で二人ともそのクラスの教え子である場合、等である。このような場合にもやはり、話者にとってどちらがその視点をあわせ易いかによって文の容認可能性が決定づけられていると考えられる。

次のような話を考えてみよう：

太郎と花子は話者にとって同程度親しい友人であるが、その太郎は大学を卒業してすぐにアメリカに留学した。程なくアメリカでの大学を卒業した彼はそのままアメリカの企業に就職。数年後向こうでアメリカ人女性と結婚し、子供を二人もうけた。二人の子供が無事成人して巣立って行ってしばらくすると、色々と苦勞をかけた妻は病気になってしまい、長い闘病生活の末、太郎の献身的な看病もむなしく帰らぬ人となってしまった。太郎は深い悲しみに包まれ、一時は妻を追って自ら命を絶つことすら考えたが、二人の子供達に励まされ、気持ちを整理するために30年ぶりに祖国日本に帰ることを決意した。日本で太郎は学生時代の恋人である花子に思いがけなく再会した。太郎は学生時代二人が好きだった本を今でも大切に持っていたが、その本を花子にプレゼントすることにした。……

さて、そこでこの後文章を続けるとしたら：

(37) 太郎は花子に本をあげた。

(38)\*太郎は花子に本をくれた。

というように、「あげた」を使う方を選ぶべきであろう。また、この話の最後の部分だけを少しだけ変えて、失意の太郎を元気づけるために花子が太郎に思い出の本をプレゼントすることにしたのだとすると：

(39)\*花子は太郎に本をあげた。

(40) 花子は太郎に本をくれた。

というふうに「くれた」を使うべきだと思われる。つまり、この場合、長い先行文脈の存在によって話者（と読み手）の視点は同程度に親しい二人の友人のうち一人である太郎にあわせられてしまっている。そのため話者の視点が同一化している太郎から譲渡行為が行われている場合は「あげた」を、花子から太郎に譲渡行為が行われている場合には「くれた」を用いるわけである。

ここまで見てきた「あげる」と「くれる」の使い分けをまとめると以下のようなになる。

表6 基準としての話者の視点

あげる	起点に話者の視点
くれる	終点に話者の視点

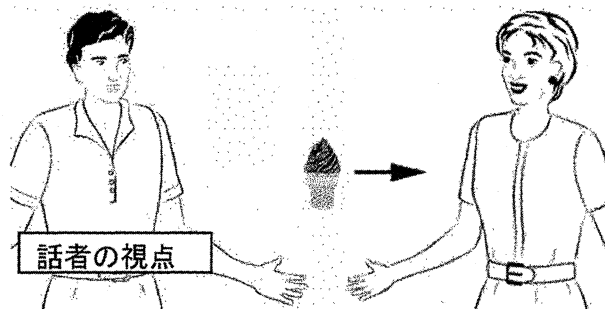


図9 あげる

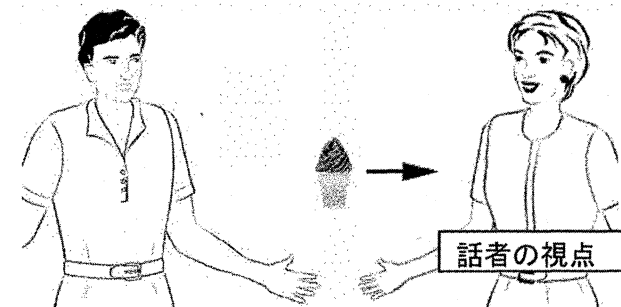


図10 くれる

以上見てきたように、日本語の譲渡を表す動詞「あげる」と「くれる」はどちらも主語から間接目的語に譲渡行為が行われているにもかかわらず、

話者の視点が主語と同一化している場合は「あげる」を、間接目的語に同一化している場合は「くれる」を用いるという規則性に支配されている。このことは日本語において、語法のありかたに話者の存在が大きな意味を持っていることの一例である。

#### 4 「行く」と「来る」

「あげる」と「くれる」の場合と同様に、移動を表す動詞「行く」と「来る」の使い分けについても話者の視点が密接に関係している。

まず、「行く」と「来る」の最も基本的な用法について、図を交えて概観してみる。ここで再び、双子の鳥好き兄弟 Tony と Fred に登場してもらう。ネネという鳥（ハワイ州の州鳥）が Fred から Tony の方へ移動していると仮定しよう。その移動の様子を「行く」と「来る」で表現する場合、その鳥の移動の方向によってどちらを用いるべきかが決まる。

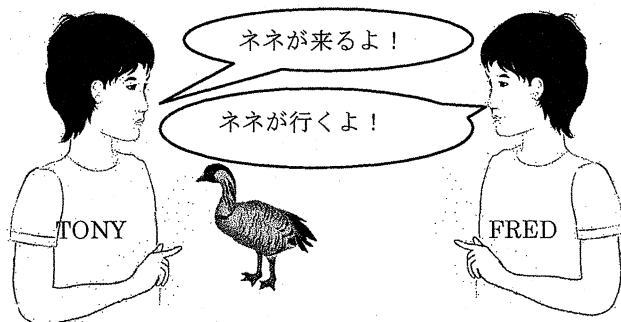


図11 「行く」と「来る」(1)

話者へと近づいてくる方向への移動であれば「来る」を、話者がから遠ざかっていく方向への移動であれば「行く」を用いる。この「行く」と「来る」の基本的な意味についての暫定的な一般化として表7のようにまとめることにする。

表7 「行く」「来る」の基本的な意味 (暫定版)

来る	話者へと近づく方向への移動
行く	話者から遠ざかる方向への移動

しかしながら、実際の「行く」と「来る」の用法は非常に多様である。例えば、移動する主体が第三者ではなく、話し手本人である場合はどうであろうか。双子の鳥好き兄弟 Tony と Fred が少し離

れた木の上にとまっている鳥を二人仲良く眺めていて、もっと良く見ようとその木の方へ Tony が移動する旨を Fred に伝え、それを Fred が了承するという場合を考えてみよう。

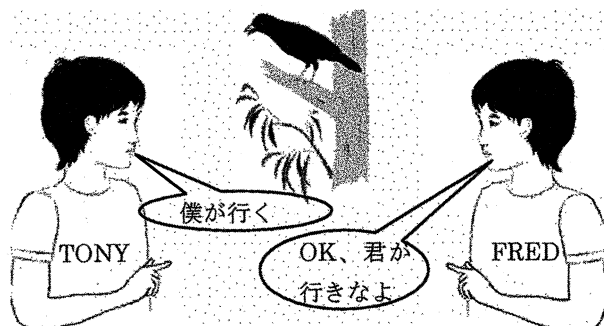


図12 「行く」と「来る」(2)

このように、第三者が話者から遠ざかる方向へ移動する場合と同様、現在話者がいる場所から話者自身が離れる場合にも「行く」が使われている。このことから、「行く」の意味は次のように修正される。

表8: 「行く」の基本的な意味(改訂版)

行く	現在話者がいる場所から離れる方向への移動
----	----------------------

ここまでの例をカバーするだけであれば、敢えて話者の視点ということを持ち出さなくとも説明できるかもしれない。しかしながら、この修正によっても説明できない例がまだまだある。

例えば、双子の兄弟 Tony と Fred は別々の家に住んでいて、ある日、道端で出会った二人が、お互いの鳥コレクションを見せ合いしようということで、兄の Tony が自分の家で見せ合いをしようと提案し、それを Fred が了承するというような場合を想定してみよう。

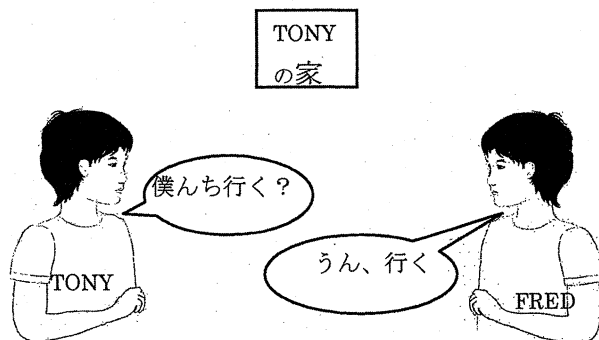


図13 「ぼくのうちに行く」

今話をしている道端から TONY の家へ、つまり、話者が現在いる場所から離れる方向への移動を表しているの、図 1 3 の様に TONY と FRED 両者とも「行く」を用いて表すことができる。

しかしながら、Tony としては、図 1 4 のように、もう一つの可能性として、「行く」ではなくて「来る」を用いて表すこともできる。

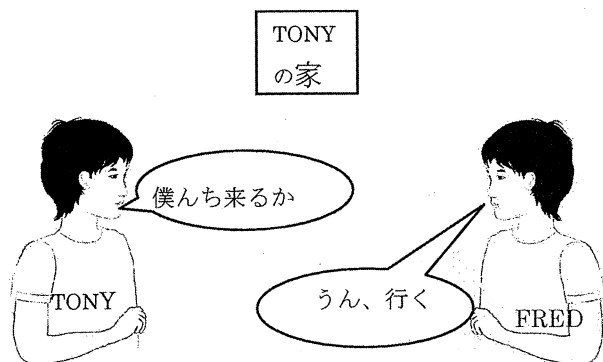


図 1 4 「ぼくのうちに来る」

このように、現在話者がいる場所から離れるという場合でも、話者の家、オフィス、故郷、のように話者の領域への移動の場合には「来る」を使うことも可能である。図 1 4 の例では、Tony にとって自分のうちは当然自分の領域であるので、「来る」が使えるが、Fred にとってはこれはあくまで兄の家であるので、自分の領域とはみなせず、「来る」を使うことができない。では、Tony は「行く」、「来る」の両者を使うことができるわけだが、その違いはいったい何であろうか。これは話者の視点が変わったとして説明することができる。図 1 3 と図 1 4 の例に見られる視点の違いは次のようにまとめられよう。

表 9 図 1 3 と図 1 4 の視点の違い

「来る」を使う場合	話者が自分の領域である家に視点を置いている
「行く」を使う場合	話者が現在自分がいる場所に視点を置いている

上記では、実際には話者が自分の家から離れた場所にいる場合でも、自らの視点をその「自分の家」に置くことがあるという例を示した。

「自分の家」のように話者自身と深い関係に在る自分の領域ではなく、むしろ、自分とは全く関

係のない赤の他人、あるいはその赤の他人の領域に話者が視点を置くこともある。この典型的な例が物語である。以下で、物語の例を用いて話者が物語の中のどこに視点を置くかによって「行く」と「来る」がどのように使い分けられるか見てみよう。

以下の物語 1 と物語 2 は同じ逸話に基づいているが独立した二つの物語であるとする。

物語 1 : ある村に一人のおじいさんが住んでいた。おじいさんは炭焼きで生計を立てていたが、その炭焼きの腕は近くの村々でもたいそうな評判であった。ある日、隣村の田吾作という名前の若者がおじいさんの家に来た/\*行った。若者は炭焼きのコツを伝授してくれるようにおじいさんに頼み込んだ。

物語 2 : ある村に田吾作という若者が住んでいた。彼は炭焼き職人であったが、なかなか満足のいく炭が焼けず、あれこれと思い悩んでいた。ある日、隣村に炭焼き名人のおじいさんが住んでいると聞き、いろいろと知恵を授けてもらおうと早速そのおじいさんの所に\*来た/行った。

これらは物語であり、話者(語り手)は登場人物とは全く関係のない第三者である。全く同じ逸話に基づくものであるが、田吾作のおじいさんのへの移動という同じ事実に関して、物語 1 では「来る」が物語 2 では「行く」が使われている。これを視点の違いということで説明するとどうなるであろうか。

物語 1 では話の中心(おそらく主人公)はおじいさんであり、話者(語り手)の視点もおじいさんの家に置かれているのが自然である。一方、物語 2 では話の中心(おそらく主人公)は田吾作であり、この段では話の主な舞台も田吾作の家だと考えられる。したがって、話者(語り手)の視点も田吾作の家に置かれているのが自然だと思われる。そのようなことから、物語 1 と 2 の例を整理すると表 1 0 のようになる。

表 1 0 : 物語 1 と 2 の視点の違い

物語 1	話者(語り手)の視点はおじいさんの家にあり、そのおじいさんの家に近づく移動なので「来る」
------	--

物語 2	話者(語り手)の視点は田吾作の家であり、その田吾作の家から遠ざかる移動なので「行く」
------	--

このように、「行く」と「来る」の使い分けに関しては、話者の視点がどこに置かれているかが重要な基準となる例を示した。

ここで、「行く」と「来る」の基本的な意味を更に改訂すると以下ようになる。

表 1 1 「来る」「行く」の基本的な意味

来る	話者が視点としている場所へ近づく方向に移動する
行く	話者が視点を置いている場所から遠ざかる方向へ移動する

## 5 結び

言語において、自己は典型的には話者として現

れる。本稿では話者としての自己が言語のシステムの中でいかに重要な役割を担っているのかを示す例をいくつか紹介した。第 2 章では英語の this/that と日本語の「これ」/「それ」/「あれ」の使い分けに際して、話者の位置が基準点として働いていることを示した。第 3 章では、日本語の「あげる」と「くれる」の使い分けに際して、話者自身の位置が基準点として働いている場合に加えて、話者自身の位置ではなくとも話者の視点が置かれている位置が基準点として働いている場合を示した。また、第 4 章では、日本語の「行く」と「来る」の区別に際して、やはり「あげる」「くれる」と同様に話者自身或いは話者の視点的な位置が基準点として働いている例を示した。いずれの例も、話者即ち自己が言語システムの中で担っている重要な役割の一つ、すなわち、基準点としての自己の役割を示している。